

平成 29 年度

事業報告書

(事業年度：平成29年4月1日から平成30年3月31日)

## 1. アルペンスキーチーム

### (1) 事業内容

#### ■選手強化事業

国内合宿開催数：8回

海外合宿開催数：1回

海外遠征：1回（ヨーロッパデフ Cup 参戦）

#### ■体制整備事業

会議開催数：9回（JPC 加盟団体会議 2回、アンチドーピング講演会、メンタル講習会、JPC 女性サポートセミナー）

#### ■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

### (2) 事業の成果

- ① 選手強化事業は予定通り実施した
- ② 海外合宿を1回実施した
- ③ メンタル講習会を開催し、各選手の欠点等を知ることができた
- ④ ヨーロッパデフカップ大会（イタリア）で下記の通りメダル取得・入賞した  
メダル：中村晃大選手 SG 銅・SC 銅・GS 銅・SL 金  
豊島選手（ジュニア）SL 銅  
入賞：北城大地選手 SC8位・SG4位・SL7位  
豊島昂太選手（ジュニア）GS4位

### (3) 事業に対する評価

- ① スタッフ間の連携不足等により選手や外部コーチやトレーナーに迷惑をかけてしまった。継続してより緻密な打ち合わせ（「報連相」）をしながら計画性を持ち、早急に対応できるようにしていく。
- ② デフわんぱくスキー教室のみ開催していなかったため、指定強化ジュニア選手を対象にしたジュニア合宿を夏や冬に開催して行く。

### (4) 課題と今後の取り組み

#### 【課題1】

強化スタッフはそれぞれの地方に居り、自分の仕事を掛け持ち、集まって打ち合わせ等ができなく強化スタッフ間の「報連相」に手落ちがあり、連携が不十分であった

#### 【取組方法1】

取組として継続してグループトークやテレビ会議等を活用し、より良い連携を図っていく

**【課題 2】**

団体独立事務所まだを設置できていない

**【取組方法 2】**

取組として H30 年度より団体独立事務所を設置できるよう、昨年度から検討していた選手登録費等の徴収を行う

**【課題 3】**

選手発掘事業で有望な選手を発掘することができない

**【取組方法 3】**

取組としてデフわんぱくスキー教室だけでなく、HP 等でチームの活躍を展開、デフリンピックをアピールした

2. アルペンスノーボードチーム

(1) 事業内容

■選手強化事業

合宿開催数：20 回（フィジカルトレーニング：山形、東京、つくば市、北海道、長野）

■体制整備事業

会議開催数：19 回（JPC 加盟団体会議 2 回、アンチドーピング講演会、メンタル講習会、フィジカルトレーニング会場視察、ジャパンパラリンピック視察）

■選手発掘事業 デフわんぱく教室へ派遣

(2) 事業の成果

平成 29 年度は、将来性が期待できるジュニア強化指定選手に大会経験を積ませるために月 2 回のペースで国内レースに参戦、その翌週の強化合宿ではレースの振り返りをしてもらう等、平成 28 年度と同様に大会実践能力の向上に軸足を置いた強化合宿とし、計画通りに強化合宿を実行することができた。

冬季デフリンピック金メダリストの原田選手を破ることだけを目標に頑張ってきた O 選手は 2 月の JSBA 全日本選手権大会ジュニア部門で 2 位入賞、入賞タイムも原田選手を上回るタイムをたたき出す等、目覚ましい成果を上げることができた。

(3) 事業に対する評価

K コーチが本人の事情により任期途中で辞任しコーチ不在のままオンシーズンに突入してしまったが、計画通りに選手強化事業を進めることができたのは臨時強化コーチを引き受けて頂いた前 T コーチの力添えはもちろん強化トレーナー、強化ス

スタッフのおかげであり、チーム代表として感謝したい。

コーチ不在の中で、選手たちは全国ろうあ者冬季体育大会を含む国内レースに5回参戦し、レースを通して試合の流れや雰囲気、レース中のモチベーション維持方法、レースの駆け引き等、より実戦能力を高めることができたことは、事業成果として評価したい。

次に、一年間の強化事業を通して選手個々の成果について感じたことを評価してみる。

まず、O選手。2月のJSBA全日本選手権大会に、ジュニア強化指定選手として初めて参戦したO選手は、スノーボード競技を本格的に初めて3年目にしてジュニア部門で2位入賞の結果を残せたことは、特筆すべきだろう。ただ本人は集中している時と怠慢な時のキャップ差が大きすぎる欠点がある。メンタルトレーニングとフィジカルトレーニングの両方をしっかりやっていたら、FIS全日本選手権大会のようなハイレベルの選手が集まる大会であっても堂々と勝負でき、多少の失敗もすぐにリカバリできたはずだ。これらの失敗点や反省点を教訓に来シーズンは是非とも頑張ってもらいたい。更に注文を付けるとしたら、用具管理やWAXに対する知識不足が見られるので自ら意欲的に学習してもらいたい。

一方、2年前にACL損傷したH選手は、再発を恐れているのかやや消極的な滑りになってしまった。H29年度の体力測定テスト結果やレース結果から見てもわかるように、3年前の冬季デフリンピック出場時の全盛期に比べて本調子ではない。本人の体力低下とACL損傷からの回復の遅さは、本人のメンタル面の弱さと取り組み意欲の弱さに原因があると思われる。再発しないようにするには、膝に負担がかからぬよう体重制限することと膝周りの筋力をつけることであり、来シーズンは、筋力トレーニングに是非とも取り組んでもらいたい。

もう一人のT選手は、攻撃的な滑りが出来ているが意外と本番に弱く、デフリンピック選考大会で成績を残すことができなかった。本人はパワフル的な滑りが持ち味の選手であり、失敗がなければ好成績が残せていたはずだ。メンタル面の弱さが本人の欠点であり、それを克服しない限り上位に食い込むのは非常に難しいと感じた。来シーズンはメンタル面を強化してもらい、持ち味を生かした攻撃的なプレーで他選手の模範となるような滑りを是非とも見せてもらいたい。

#### (4) 課題と今後の取り組み

##### 【課題1】

チーム運営の基本計画、その実施、評価、改善のプロセス（PDCAサイクル）に基づく取り組みを行う

##### 【取組方法1】

月1回の定例ミーティング（強化会議）を実施し、強化合宿の計画、実施、評価を

実施する

**【課題 2】**

チームとしての危機管理体制を構築し、実行に移す

**【取組方法 2】**

H30 年度のチーム重要課題として捉え、協会と共に危機管理体制構築の検討と危機管理マニュアル整備の検討を行う

**【課題 3】**

団体独立事務所を設置できていない

**【取組方法 3】**

団体独立事務所立地条件の検討を進めるとともに、資金源確保の一環として H30 年度より選手登録費、公認料を徴収する

3. スノーボードフリースタイル

(1) 事業内容

■選手強化事業

合宿開催回数 … 34 回

- ・オフシーズン（バグ、室内ハーフパイプ） … 14 回
- ・オンシーズン（岐阜、湯沢、北海道） … 12 回
- ・海外強化（ニュージーランド／お盆休み） … 1 回
- ・体力測定、トレーニング講習 … 2 回
- ・ドーピング、メンタル講習 … 2 回
- ・SUP、トレッキング … 3 回

(2) 事業の成果

平成 29 年度は年間を通して以下のような成果を上げることができた。

- ① 人工芝の斜面を滑り降りジャンプしてエアーマットに着地できるコースがある安全性の高い施設で合宿を行い、ゲレンデでは難しいオーリーの反復練習とゲレンデでは安全性の面からなかなかトライできない縦回転の技に集中して取り組むことができた。結果として一部の男子選手がハーフパイプで実践できるようになり、女子選手は練習の頻度が上がってきた。
- ② 5 月から 11 月初めまで屋内にある人工雪のハーフパイプ施設（全長 100m 高さ 4m 幅 14～17m）でハーフパイプの滑走技術を向上させる為の練習を実施できた。またこの施設で行われた大会に参戦したことで、大会に向けてメンタル及びフィジカルの面で、自分自身で調整していく経験を積むことができた。

- ③ スノーボード専門学校のトレーナーによる、体力測定及びトレーニングを年2回実施し、体力向上や身体全体をうまく連動させる為のトレーニングを積むことができた。
- ④ ニュージーランドにある国際規格のハーフパイプが常設されているゲレンデにて滑り込みを行い、日本と違う雪質や様々な斜面に対応できる滑走技術及びデフリンピックを見据えた海外のゲレンデというロケーションに適応する経験を身につけることができた。
- ⑤ 国内のゲレンデで数多くの合宿を実施し、またハーフパイプ、スロープスタイル、ボードークロスそれぞれの競技の FIS 大会及び JSBA 大会に参加した。その結果、ボードークロスでは男子選手で FIS 大会 3 回戦まで勝ち上がり、女子選手で JSBA 大会一般クラス 6 位、ハーフパイプでは SAJ 大会一般クラスで 1～3 位にそれぞれ入賞という成績を収めることができた。結果的に 3 つの競技の大会を経験することでスノーボードの総合的な滑走技術を上げることができた。
- ⑥ ジュニア育成選手には上記のほとんどを強化指定選手とともに積極的に参加してもらい、結果として FIS 公認ハーフパイプ大会で 5 位入賞の成績を収めることができた。
- ⑦ SUP や登山を合宿として実施したが、不安定な場所でバランスを保つ身体能力を向上させる良い機会だった。また登山ではスタートからゴールまでの間、発汗による冷えの対策や体力の配分を自分で考え実施することがスノーボードの大会でも求められるので良い経験になった。

### (3) 事業に対する評価

強化指定選手の技術レベルに個人差はあるが、デフリンピックで好成績を収められる為に強化指定選手全員がもっとメンタル面でも成長できるよう練習の難易度を高める必要があったので、コーチに安全な練習場所や安全に上達する為の準備をしていただきつつ、難易度の高い練習を数多く実施した。

また、強化合宿の中で数多くの大会に参戦したり SUP や登山を合宿に取り入れたり、ハーフパイプ、スロープスタイル、ボードークロスと競技が違う大会に参加することで、強化指定選手の大会に対するメンタルやフィジカル面で必要な経験を積むことができた。

その結果、強化指定選手それぞれの技術レベルを向上させることができたので、チームとしてはデフリンピックに向けて順調に成果が出ている。

ただ、オリンピッククラスの大きいハーフパイプで行われた大会では強化指定選手全員が納得のいくような滑走ができなかったので、引き続きハードルを上げた練習を積み重ねなければならないと感じた。

ジュニア育成選手は年間を通して強化指定選手と一緒に練習できたことにより、

強化指定選手に引けをとらない滑走技術のレベルまで達してきたので、次年度はメンタル面で成長できるよう指導していく。

次年度は今年度の反省点を基に強化指定選手及びジュニア育成選手の技術レベルの底上げができるように強化合宿の練習内容を密に計画し、コーチとの連携を高めながら実施していく。

またスノーボードの技術レベル向上に繋がるよう様々なトレーニングの指導を実施していく。

#### (4) 課題と今後の取り組み

##### 【課題1】

団体独立事務所を設置できていない

##### 【取組方法3】

H30 年度より団体独立事務所を設置できるよう、選手登録費、公認料の新設など資金造成の検討を行う

#### 4. カーリングチーム

##### (1) 事業内容

##### ■選手強化事業 … 30 件

新潟オープン大会 (11 月 04～05 日) … 2 位

トライアル戦 (11 月 18～19 日) … 敗退

バナナ杯リーグ戦 (9 月～5 月) … 2 部残留

##### ■体制整備事業 … 12 件

##### (2) 事業の成果

平成 29 年度は、デフリンピックの中間目標として掲げている。

- ① チームワークの向上、②アイスリーディングを全員の確にできるようにする、③ 全大会でショット率を 60%～70%まで向上させ作戦に沿ったゲーム展開にする、④サインを徹底し適格なスweepをする、⑤ドロースhot・テイクアウトショット完成度の向上を重点的に行った。

そのため、事業数、金額ともに平成 28 年度と比較し少し減っているが特に選手強化活動事業として 30 を超える事業を計画し、大会資格が得られず事業中止となった以外 (3 事業) は全て予定通り消化できた。

また体制整備事業については、事業が減っているが、テレビ電話で強化スタッフ・コーチが密に話し合いをしたことが良かった。

##### (3) 事業に対する評価

平成 29 年度は世界選手権後、男子と女子のメンバーが一部変わってしまい、立ち上げを行ったような感じになってしまった。

事業もスケジュールが多く、強化スタッフの負担が大きくなってしまった。

次のデフリンピックに向けては、さらに①効果的 ②効率的に行う余地があるという手応えがある。事業そのものが無駄なく成果につながるようにするために、強化指定選手の技術向上をレベルアップし、さらに機器・機械を取り入れたデータ化をしていく必要がある。

#### (4) 課題と今後の取り組み

##### 【課題 1】

団体独立事務所を設置できていない

##### 【取組方法 1】

H30 年度より団体独立事務所を設置できるよう、選手登録費、公認料の新設など資金造成の検討を行う